

学環学府

東京大学大学院情報学環 学際情報学府

Interfaculty Initiative in Information Studies

知の蓄積と応用—アジアのなかの学環

Graduate School of The University of Tokyo

Number.

10

INTERVIEW

過去からの知の蓄積を、未来へつなぐ

吉見俊哉教授インタビュー

情報学環のサイトには、かわら版、新聞錦絵のデジタル・アーカイブが公開されている。

その数は約900点。新聞錦絵の色の美しさ、ユーモラスなかわら版など、魅力あるものが自宅のパソコンでも見ることができる。今回は、学環が所蔵している資料などのデジタル・アーカイブ化のプロジェクトを進めている吉見教授に話を聞いた。



Q 資料のデジタルアーカイブ化を始めたのは?

僕は、もともと歴史と社会学が交差する地点から大衆文化や盛り場、メディアの歴史を考えてきた人で、アーカイブに詳しいわけでもジャーナリズム専門でもなかったのね。でも、80年代後半から情報研究、メディア研究の潮流が、情報社会、ニューメディアへと、つまり“新しいこと”へとどんどん向かっていったでしょ。僕はへそ曲がりなところがあって、それならば自分は新聞研時代から培われてきた知の蓄積、所蔵してきた資料にこだわってみたいと思うようになった。社情研、そして情報学環を、どうやって歴史化するかという課題ですね。

Q 現在は、どのようなことを?

90年代半ば頃からの「ニュースの誕生」プロジェクトで、幕末から明治初期にかけてのかわら版約600点と、新聞錦絵約300点のデジタルアーカイブを作成し、総合研究博物館で展示会も開きました。今はその延長線上の「戦争とメディア」プロジェクトで、旧新聞研から所蔵していた第一次大戦時のプロパガンダポスター665点と、第二次大戦時にフィリピンや中国大陸でばら撒かれた大量の宣伝ビラやポスターのアーカイブを構築しています。資料のデジタル化だけでなく、全文をテキスト入力し、訳文をつける。これは単純ですが、凄まじく時間のかかる作業なんです。それからもう一つ、印刷形式の判読が大変なのね。第一次大戦の頃というのは、それまでの石版からHBプロセス、オフセットといった新しい印刷技術に移行していく過渡期で、幾種類もの技術が混在しています。そここの判読術を、今では美大でも教えなくなっちゃった。それで今回は、70代を越える大先生たちに来ていただき、数ヶ月に及び版式調査をすることで、やっと解明していきました。

Q 他にどんな資料が情報学環にはあるのでしょうか?

貴重な植民地の新聞原紙、900枚を超える号外コレクション、社会情報資料センターには、マイクロフィルムが約5万本あります。結構、私たちは財産持ちですよ。ジャーナリズム、報道に関わる印刷媒体の資料で言えば、日本国内ではトップレベルだと思いますね。ところが、我々がこれほどの資料を持っていることが、あまり知られていないんじゃないかな。この5万本のマイクロは、保存状態が必ずしも良くなかったので、一部、保管してあるキャビネットを開けると、お酢が腐ったようなひどい臭いが部屋中に広がる。腐食してきているわけ。臭いだけならまだしも、フィルムが昆布のようにうねってきたものもあって、参っちゃった。今、慌てて対応策を練っています。

Q このデジタルアーカイブ化プロジェクトのこれからは?

まずは、資料をできるだけデジタル化し、データベースを構築して外に公開していくことが第一歩。それと同時に、全国各地にある、似たようなデジタルアーカイブと横のネットワークを形成したい。そうした全国的な連携ができれば、他の地域の研究者と共同研究をするベースになると思うのですね。

また、情報学環が所蔵している資料だけでなく、ここで培われる知識、思想、研究の方法、認識の方法論までをデジタル化できないかと考えています。個々の資料のコレクションをアーカイブ化するだけでなく、そのような資料体にアプローチしていく方法論をアーカイブ自体に多面的に組み込みたい。というのも、現在の情報学環には、一方では旧学環から継続している学際的な広がり、他方では新聞研以来のメディア研究の歴史的な厚みと国際的ネットワークがありますね。そのようなネットワークとアーカイブを継続的に結びつけていくプラットフォームを、デジタル空間に構築したいと思っています。

こうやって、一連のアーカイブ化のプロジェクトが、同時並行で進めている新しい百科全書構築の国際プロジェクトや大学院教育とも連動していくことになることを狙っています。



◀ 現在進行中の、戦時プロパガンダポスターデータベース構築作業の入力画面

TOPICS

国際シンポジウム「朝鮮半島の共存と東北アジア地域の協力体制」

情報学環教授・姜尚中



金大中・前韓国大統領

去る5月23日(月)、朝鮮半島にフォーカスして東北アジア地域の現状と将来について語り合う国際会議が開催された。

シンポジウムは、本情報学環・学際情報学府と東洋文化研究所および東京大学東北アジア研究会の共催のもと、トヨタ財団と朝日新聞社の後援を得て、本大学の安田講堂で盛大に開催された。一千名を越す聴衆の熱気溢れる雰囲気の中、安田講堂に金大中・前韓国大統領の張りのある声が響き、その記念講演の内容は、聴く者の胸を打つほどの感動を呼び起こした。

その後、ニュースキャスターの筑紫哲也氏が司会に、韓国・日本・米国・中国・ロシアの、各大使や公使、外務省外務審議官などを交えたシンポジウムがあり、東北アジア地域の各国の立場

を生る声で聴くことができたことは有意義であった。この後、私の司会で、東洋文化研究所長の田中明彦教授や韓国、米国、ロシアなどからのゲストを交えた、研究者中心のシンポジウムがあり、テーマをより深く掘り下げることができた。

今回の催しには、招待客も含めてVIP級の要人が顔を揃えるため、セキュリティの問題など、数々の懸案があったが、予想以上の盛会のうちに無事シンポジウムを終えることができた。またNHKやワシントン・ポスト、韓国のSBSなど、内外からテレビや新聞など、総勢30社近くにおけるメディアや報道機関が取材に訪れ、今回の国際会議への関心の高さを示していた。

小宮山総長の冒頭挨拶にある通り、こうした国際会議が本大学で実現したことは、画期的な意味をもっている。世界のリーディング・ユニバ



左より、司会の筑紫哲也氏、羅鍾一 韓国大使、程永華 中国大使館公使、田中均 日本外務省外務審議官、アレクサンドルP・ロシュコフ ロシア大使、マイケルW・マハラック アメリカ大使館首席公使

ーシティを任じる東京大学が、東北アジア、さらに東アジアの知的ネットワークの拠点として積極的な役割を果たすことを内外に明らかにできたからである。

この点で東北アジア地域におけるメディア環境やコミュニケーションと社会変動などの研究テーマを掲げる本学環・学府の果たす役割も益々大きくなっていくに違いない。

なお、シンポジウムは、近々、報告書およびDVDなどに編集して内外に配布される予定である。

今回の国際会議は、本大学および本学環・学府が一体となって東北アジア地域のメディアや情報、国際環境やネットワークなどについて積極的かつ実践的な研究を推し進めていく大きな契機になった。今後、こうした活動を追い風に、この方面の国際的な共同研究と協力体制の構築に邁進したいと願っている。



左より 姜尚中 情報学環教授、田中明彦 東洋文化研究所所長、徐東暎 尚志大学教授(韓国)、スコット・シュナイダー アジア財団シニア・アソシエイト(アメリカ)、アレクサンドル・ヴォロンツォフ ロシア科学アカデミー東洋学研究所・朝鮮・モンゴル研究部長

学環シンポジウム・修士課程入試説明会開催

情報学環教授・荒川忠一



「学環・学府まんだら」を紹介する安齋利洋氏、鳥海希世子氏(M2水越研)、飯田豊氏(D2森研)(左より)

毎年の恒例となっているシンポジウムが、6月4日、本郷キャンパス武田先端知ビルにて、「智慧の環・学びの府:情報知の叢生と繁行(はんえん)」と銘打って開催された。

まず、学環の主要プロジェクトである、21世紀COE「次世代ユビキタス情報社会基盤の形成」、コンテンツ創造科学産学連携教育プログラム、ベネッセ先端教育技術学講座について、それぞれの代表者などから紹介。つづいて、

「学環・学府まんだら」と題し、学環・学府の人や研究のつながりをビジュアル化するソフトウェアを使い、各教員の研究の連携が学生の指導教員としての立場を通じて広がっている様子が示された。これは、水越伸助教授が代表のMoDeプロジェクトのメンバーで

ある安齋利洋氏(メディア・アーティスト)が開発したシステムを応用し、安齋氏に作成していただいたもの。その後、「芸術・技術と社会を結

ぶ情報知を育む」と題し、坂根巖夫氏(前情報科学芸術大学院大学学長)、村田麻里子氏(京都精華大専任講師・D3水越研)、モデレータとして私が加



未来の「後輩」へ、学府の学生生活を話す学生

わり、メディアアートなどを素材とした表現活動や、それらのキュレーションなどの新しい方向について語った。本田由紀助教授および原田至郎助教授の司会によって進行したシンポジウムの参加者約300名は、引き続き行われた修士課程入試説明会へ臨んだ。

入試説明会では、各コース説明、学府学生から学生生活の話、参加者からの質問とその回答などが行われた。長時間にわたるシンポジウム及び入試説明会だったが、終了後も、教員に熱心に質問する参加者の姿も多くみられた。



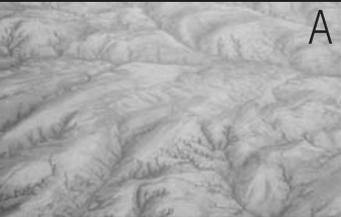
会場一杯に集まった参加者

PROJECT

黄土高原生態文化回復活動プロジェクト

—— 共生的価値創出の試み ——

東京大学大学院情報学環 助教授 安富 歩



A

黄土高原とはどんなところか

中国西北部一帯に広がる黄土高原。二千年前には草原と森林が織りなす光景が広がっていましたが、徹底した開墾の結果、現在ではまとまった森林のほとんどない黄色い大地となっています(写真A)。春になるとこの

大地を数千万の農民が耕し、舞い上がった土が強風に吹かれ、いわゆる「黄砂」となります。



黄土高原生態文化回復活動

客員助教授として情報学環に来ていただいている深尾葉子助教授(大阪外国語大学)がこの地域で数十年にわたって展開されたフィールドワークに基づく知識と人脈を基盤として、私たちは生態と文化の回復を目指す活動を展開しています。

私たちは世の中が、複雑に織り上げられたコミュニケーションからできている、というごく当たり前の前提から出発します。地域や村の人々のリズムや生活にできるだけ寄り添って、「いきあたりばったり」の聞き取りや参与を行おうとします。

その動き方の特徴は、調査の目標や計画をあらかじめ立てずに、地域の人々がつくりだす動きのなかで、「波乗り方式」と自称する手法で活動する点にあります。「援助者/援助対象」という二分法を排除し、あくまで相互に影響を及ぼしあう主体として、参加者が対象社会に与える影響を認識し、同時に対象社会から参加者が影響を受けることを活動に組み込みます。このようなアプローチを「共生的価値創出」と呼んでいます。

情報学環は2004年3月にこの地域の唯一の大学である榆林学院とパートナーシップ・プログラムを締結いたし、これに基づいて榆林学院は「黄土高原生態文化回復センター」を設立しました。2005年3月には同学院の苗潤才学長が東京大学に花田学環長を訪問されています。

過去三年の成果として最も重要なものは、小清水式自然浄化法による糞尿処理装置の導入です。これは好気性発酵によって糞尿を短時間かつ安価で有機液肥に転換する技術です。私たちは有限会社DGC総合研究所と青木電器工業株式会社と

の協力により、榆林学院に第一号機を設置いたしました(写真B)。

私たちはこの地域の農村の水が化学肥料と合成洗剤によって著しく汚染されていることを発見しました。そこで日本大使館の草の根無償援助「都市糞尿処理・農村飲料水改善プロジェクト」を米脂県婦女連合会に導入し、同県県城に糞尿処理装置第二号機を設置するとともに、農村部の二百箇所の井戸について三回の水質調査を実施しました。

榆林地区は民間主導による緑化活動が盛んなことで知られています。緑化活動の中心人物は老植林技師朱序弼さんです(写真C)。この方は植林のすばらしい技術を持つとともに、人をそそのかして緑化活動をさせる天才です。私たちはそういった緑化団体の連絡を保ち、国際的な協力を作り出すために「黄土高原国際民間緑化文化ネットワーク」を設立しました。

私たちは文化資源の回復を生態系と同様に重視しており、その一環として、革命以前におこなわれていた伝統的な婚礼の様式を復活させるという試みを2004年1月におこないました。写真Dはその一場面で、この輿に日本人の花嫁を乗せて行列がおこなわれました。47年ぶりに輿を復活させた村人たちは強い自信と満足感に輝いていました。この婚礼の様子は新聞テレビで広く報道されました。

このほか、地元のリンゴを用いたリンゴエキスの試作、土壌保持力の高い植物から作ったオリゴ糖の日本への輸入(有限会社アジルから販売)といった活動を展開しています。

昨年12月に情報学環(駒場)の主催で「黄土高原生態文化回復プロジェクトシンポジウム」を開催し、本年度夏学期には深尾助教授に大阪から通っていただいで学府での授業を担当していただきました。この授業の一環で小池百合子環境大臣にプロジェクトを説明するという出来事もありました(写真E)。秋には国際交流基金のアジア理解講座で連続講義を行います。活動の状況は私のホームページ <http://www.iii.u-tokyo.ac.jp/~yasutomi> に掲載されており、今年も夏には現地での活動を展開しますので、興味のある人は一緒に現場に来てくださることを探してください。

写真Bは第一号機を設置した様子。写真Cは老植林技師朱序弼さん。写真Dは伝統的な婚礼の様子。写真Eは深尾助教授と苗潤才学長の対談の様子。



C



D



B



E

NEWS

第6回COEシンポジウム開催

5月10日駒場キャンパス教養学部18号館ホールにて、第6回COEシンポジウム「コピキタスを哲学する」が開催された。坂村健教授が、「コピキタス・コンピューティングの思想」と題して基調講演を行った。その後、共同討議では、石田英敬教授が「コピキタス化する宇宙と人文知の未来」を問題提起し、パネリストとして西垣通教授、吉見俊哉教授、門脇俊介教授(大学院総合文化研究科)が登壇した。総合司会は、小林康夫教授(大学院総合文化研究科)。



フロリアン・クルマス氏「ヒロシマ」講演会

情報学環は本年度、客員教授としてドイツ・日本研究所所長のフロリアン・クルマス氏を迎えた。クルマス氏の専門は社会言語学および言語社会学。6月1日には、さっそく今年出版された著書「Hiroshima (Verlag C.H.Beck, 2005)をテーマに、日本語での講演会をお願いした。今年には広島、長崎の原爆投下から60年目に当たる年だが、クルマス氏は、米国による原爆投下当時の徹底した情報操作政策と今日まで残るその影響を興味深く分析されている。日



本の外側からの「ヒロシマ」観察者としての新たな視点に対して、参加者から多数の質問が出され、盛りあるディスカッションとともに、盛会のうちに終了した。(助教授・林香里)

「ミーム論」の権威・ブラックモア博士特別セミナー



6月23日、イギリスからスーザン・ブラックモア (Susan Blackmore) 博士を招いた特別セミナー「ミーム・マシンの進化(The Evolution of Meme Machines)」が情報学環暫定アネックスで開催された。ブラックモア博士は主著「The Meme Machine」(邦訳「ミーム・マシーンとしての私」:草思社)に代表されるミーム学の世界的研究者であり、人間の脳はミームによって進化したとする「ミーム駆動」仮説を提唱する先鋭的な研究者としても知られている。今回、「愛・地球博」の催しに合わせて来日したのを機に、情報学環でのセミナーが実現した。

聴講者とのインタラクションを大切にす博士の講演は、会場全体を巻き込んで活気溢れるものとなった。立ち見も出るほどの会場を埋め尽くした聴講者からは、ミーム学の検証方法についてなどの熱のこもった質問が多く寄せられ、セミナーは盛況のうちに終了することとなった。(渡邊義弘・DI佐倉研)

第16回学環講話会「キャラクターとファッション」開催

6月15日情報学環アネックス2階会議室にて、第16回学環講話会が開催さ

れた。今回は、「キャラクターとファッション」と題しイラストレーターの杉谷知香氏が登壇。杉谷氏は、ファッションデザイナーからイラストレーターへと転身、彼女が描くキャラクターは、現在、雑誌に連載されている。このキャラクターの紹介を交え、これまでの活動の様子や、モバイルのコンテンツへと活動範囲を広げていくことなど、今後の展開も話した。今回は、進行役の河川洋一郎教授が、以前、自身が作成したキャラクターも披露、集まった参加者たちの興味をひいた。



岡田敦氏(平成16年度修士修了)の研究が新聞で紹介

この春、学環修士課程を修了した岡田敦氏の研究が、日経産業新聞(2005年5月18日朝刊8面)にて紹介された。これは、論文「頭部装着型実音場拡張システム」岡田敦、飯田誠、苗村健(インタラクティブ2005, pp.227-228)に対する取材がきっかけとなり報道されたもの。

メルプロジェクトからのお知らせ

公開研究会のご案内

メルプロジェクトでは下記の要領で月例公開研究会を行ないます。参加申込み・参加費は不要、どなたでもご参加いただけます。詳しくはウェブサイト<<http://mell.jp/>>をご参照ください。場所・時間はいずれも=情報学環暫定アネックス2F会議室/午後2:00~6:00

●9月17日(土)●

テーマ:異文化=cross culture、対話 / つなぐ=dialogue/connecting [送

り手と受け手、企業と大学、学校と博物館など、異なる社会領域間にあらたなコミュニケーションの回路を生み出す営みについて]

●10月22日(土)●

テーマ:東アジアのメディア・リテラシー [ソフィア・ウー(台湾政治大学)さんと進める「東京宣言」中間検討]

●11月26日(土)●

テーマ:コミュニティ=community、循環/パブリック=circulate/publicing [メルプロジェクトの諸活動を維持し、社会に広げ、人々が交流・交換できるパブリックな場を生み出していく試みについて]

●12月17日(土)●

テーマ:シンポジウムについて、及び「東京宣言」の検討

平成18(2006)年度博士課程入学試験の概要

平成18(2006)年度博士課程入学試験を下記の要領で実施します。

詳細は、必ず学生募集要項を取り寄せて確認のこと。学生募集要項は8月下旬より配付予定。

1. 受入予定人員

学際情報学専攻

社会情報学コース 約9名
文化・人間情報学コース 約12名
学際数理情報学コース 約9名

2. 選抜方法

(1) 一次試験(修士論文・書類審査)
(2) 二次試験(口述試験、一次試験合格者を対象に行う)

3. 出願期間

平成17(2005)年12月5日(月)~12月8日(木)
*出願方法は、募集要項を参照のこと。

BOOKS



「ダーウィンの方法—運動からアフォーダンスへ」

佐々木正人著/岩波書店

知性とはどのように動くことなのか。世界のカテゴリーを行為で記述しようと試みたダーウィンの動物研究を再評価し、柔軟性の謎に迫る90年代の運動研究の動向を紹介した。(佐々木正人)



「韓国のデジタル・デモクラシー」

玄武岩著/集英社新書

韓国では現在、世界でも稀有なデジタル・デモクラシーの実践が試みられている。本書は、ネティズン(ネット市民)により電子民主主義文化が隣国で花開いた背景を解き明かしながら、民主化運動の歴史と現在を描いたものである。韓国政治とメディアの「今」を理解するための、コンパクトな一冊。



「eデモクラシー・シリーズ 第3巻 コミュニティ」

岩崎正洋、河井孝仁、田中幹也編/日本経済評論社

「第6章 アメリカ合衆国」野口智子(D3田中明彦研)、土屋大洋

国内外のeデモクラシーの実現に取り組むコミュニティを主題とした本です。第六章で、アメリカ合衆国の電子政府と電子自治体の動向とNPOの取り組み事例について、慶應義塾大学の土屋大洋先生と共著で執筆しました。(野口智子)



「メディアリテラシーの道具箱—テレビを見る・つくる・読む」

東京大学情報学環メルプロジェクト・日本民間放送連盟編/東大出版会

テレビというメディアとうまくつき合うための素養を身につけるには? 映像メディアのリテラシーについて、その具体的な作法や技術、知恵をわかりやすく解説。映像作品を収録したDVD1枚付。



発行

東京大学大学院情報学環・学際情報学府 ● 〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1 ● e-mail: news@iij.u-tokyo.ac.jp ● URL: http://www.iij.u-tokyo.ac.jp



Computer Images by Yoichiro Kawaguchi
編集委員: 荒川忠一(委員長)・林香里・稲葉理恵
発行: 2005年7月